市民環境大学OB会
ニュースレター

第５８号　２０２６年9月１７日　発行



黒川清流公園の花シリーズ３
キツネノカミソリ　2026/8/8
（別所さん提供）

OB会活動の最近の話題

日野市民環境大学OB会では、会員の皆さんが日頃いろいろなグループに参加活動した内容を毎月第3木曜日の例会において披露頂いています。また話題提供として、会員の皆さんが日頃気づいたことなどを例会で発表してもらいそれを元に話し合いを行っています。

ニュースレターでは“活動イベントニュース”や“例会情報”として主に項目のみでこの状況を紹介してきました。しかし項目だけでは個々の内容が十分伝わっていないとも思われ、今後拡大版として定期的に少し詳細に報告することになりました。今回は活動イベントニュース拡大版を以下に紹介します。

OB会メンバー　活動イベントニュース

- **恒例のカワセミハウス環境パネル展に今年も参加　６月４日(木)～２０日(土)**

  これは黒川マイスターとのコラボで“日野市の水事情”と題し、別所さん中心にパネルを準備して展示されました。パネルでは以下の項目でグラフを交えて解説されています。

  ①我々の日常生活の必要な水は十分確保されているか
  ②2025年の降水量は少なかったか
  ③異常値の正体は(日最高降水量の異常値の意味するもの）？

  水は我々生物が生きていくうえで必須のものですが、最近の温暖化の影響を大きく受け、渇水や洪水が多発し、管理することが非常に難しくなっています。しかしあきらめず、大元の温暖化対策から身近な川の管理など地道で継続的な努力が必要になっていくと思われます。

- **市民環境大学講座開講　（受講生約30名）　　6月4日から開講**

  本年度の市民環境大学は市職員を含め約30名と多くの参加応募がありました。OB会では会の紹介を兼ねてニュースレター56号を全員に配布しました。

- **「森と湧水の黒川公園テクテクmap」ポスター版カワセミハウス内へ掲示**

  OB会員の田中徹さんの労作「テクテクmap」がポスタータイプとなってカワセミハウス内に掲示されることになりました。公園散歩にはとても分かりやすく素敵なmapです。

- **ニュースレターが日野市ホームページで閲覧可能**

  OB会ニュースレターが第50号から日野市のホームページで閲覧可能となりました。
  閲覧方法：日野市ホームページのサイトマップにカワセミハウスと入力し検索→施設案内→カワセミハウス→市民環境大学→OB会ニュースレター

- **カワセミハウス協議会報告（８/20例会）**

  環境分科会報告で、黒川清流公園「ホタルのタベ」の報告がありました。ホタルは３０頭以上観察されました。参加申し込みは８２組１２９名、平均倍率４．４倍。　ちなみにホタル観察で有名な「真堂が谷保」では500頭以上見られたようです。

- **OB会活動費への寄付の件**

  この度OB会活動費として、小倉先生及び田中徹さんより寄付を頂きました。少ない活動費で活動されているOB会にとっては大変心強いご厚意となりました。

ＯＢ会コラム①

OB会コラム①は前号に続き川村桂子さんの富山の水を知ろうシリーズです。今回はその２として、おいしさのワケと題して解説頂きました。次ページ目には名水の紹介と他都市（関東近辺）との降水量の比較データもあり、大変興味深い投稿です。富山県の人気の高さの一端が垣間見えます。

富山の水を知ろう／ おいしさのワケ

ＯＢ会　　川村　桂子

雪のダム

標高3000m級の山々、北アルプス立山連峰に積もった雪は夏でも消えない万年雪となり、やがて清らかな雪解け水となります。季節を問わず水温の低い（夏でも15℃前後）清冽な水が豊富に流れ出す。

緑のダム

県土面積の約67%を森林が占め、植生自然度（自然度の高い原生林的な植生区域の県土に占める割合）は30%（1997 年）、全国第3位。本州では第1位の緑豊かな県です。森林は降った雨を枝葉や落葉、落枝の堆積層にいったん蓄えて、浄化しながら次第に地中へ染み込ませていきます。

水のダム

洪水調節や水道用水の供給、発電などいくつもの役割をあわせ持つ多目的ダムを建設するなど新たな視点で水源開発が進められています。
美しい自然環境のなかに建設されたダムは、年間を通じて良質な水を安定して供給し、おいしい水を支えるために欠かせない基盤となっています。
富山平野に広がる水田もまた大量の水を受けとめる、いわば〝大地のダム〟です。
はるか立山連峰の頂から平野のすみずみにいたるまで、富山県はまるで県全体が満々と水をたたえたダムそのものだといえます。

世界でも有数な急流河川

立山連峰に源を発する定願寺川は源流から河口まで約56キロメートルで、日本一長いとされる信濃川の約6分の一の長さです。このわずかな距離の間に標高差約3000メートルをいっきに流れ下る、世界でも有数の急流河川です。

富山県には5つの一級河川を含む大小310以上の川が流れています。代表的な県内河川と全国各地の大河川と比べると勾配が急激で、外国の大河川とでは比較にならないほどの急流です。急流ゆえに降った雨はすぐに海へ流出しますが、これは川にとっては途中で汚染される間がなく酸素による新陳代謝も活発で、水は常にきれいな状態です。

川は日本の地質の見本

富山県の地質には、数億年から数千年前までのあらゆる時代の地層や岩石が、そして日本列島に分布するあらゆる種類の地層や岩石が存在しています。山岳地帯は花崗岩や変成岩（約三分の一が石灰質の岩石）、中生代の砂岩や石樂岩で、富山湾を取り巻くように分布する前山や丘陵地は新第三紀の地層や堆積岩、火山岩でできています。平野部は新しい時代の扇状地が発達し、富山湾を中心に同心円を描くように県下全域に形成された同質の大地を川が流れています。花崗岩は水をろ過する働きがあり、新第三紀の地層や岩石、石灰質の岩石からは、水のうまみとなる各種のミネラルが溶け出しています。まさに日本列島のひな型ともいえる恵まれた地質に磨かれ育まれ、富山の水はおいしくなっていくのです。

大地は天然の浄化フィルター

富山県では県東部の黒部川、片貝川、早月川、定願寺川、県西部の庄川がそれぞれ見事な扇状地をつくり出し、しかもこれらの扇端部が重なりあって、全国的にも珍しい「複合扇状地」が広がっています。山に降った雨や雪は扇状地の地下をゆっくりと流れながら地中の成分を吸収し、扇端部で湧き水となる頃には、まろやかでおいしい水となっているのです。自然のろ過フィルターが気が遠くなるほど長い時間をかけて、雨や雪をミネラルウォーターに変えているともいえます。

富山県では、水道普及率が93.2%（全国97.6%、平成23年度末）と低いのは、扇状地が県下一円すみずみまで届けてくれる豊富な地下水を自家用の井戸で汲み上げて利用している家庭が多いからです。さらに扇状地や上流で地下にしみ込んだ水は河口近くで湧き水となり、さらにその先の富山湾の海底からも湧き出していることが、近年明らかになりました。魚津では200m沖合い、黒部だと400～500m沖合いにみられる「「海底湧水」。豊富な栄養分を含んだ淡水が絶えず海底から湧き出して、富山湾の生態系を支え、〝海底のオアシス〟〟栄養の泉〟などと呼ばれています。海底湧水は世界各国にあり調査が始まっていますが、中でも流量が豊かで観測しやすいことから、富山湾は海底湧水の研究においてもモデルとなっています。

富山県生活環境文化部県民生活課より

富山県内には「とやまの名水」として認定された湧き水が66か所あり、これらは専門家の意見を基に選ばれた場所です。

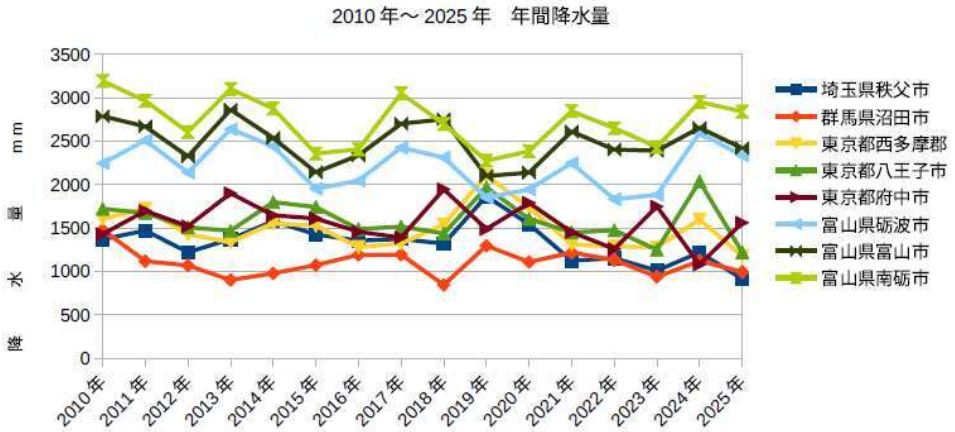




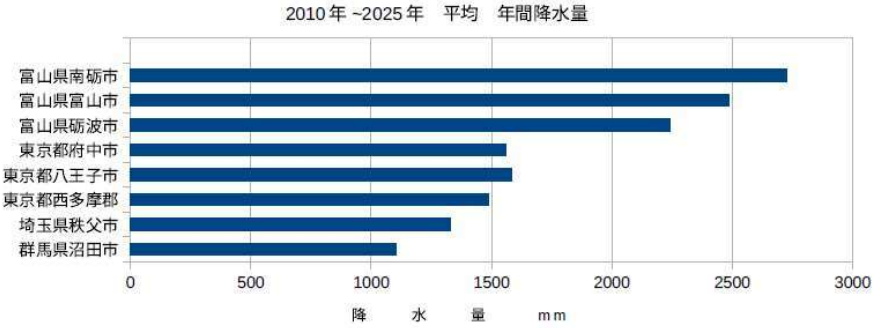
名水の例： 不動の滝霊水　　影無し井戸　　脇谷の水

東京都3水系水源貯水池、多摩川流域（八王子市、府中市）、富山県3都市（チューリップ公園所在地の砺波市、富山市、南砺市）の （2010年~2025年）の年降水量と16年の平均年間降水量（下図）に示す。

東京都３系水源貯水池、多摩川流域、富山県３都市の降水量



富山県（南砺市、富山市、砺波市）東京都（府中市、八王子市、西多摩郡）埼玉県秩父市、群馬県沼田市の年間降水量



富山県の南砺市、富山市、砺波市での降水量がダントツに多い。

OB会　例会情報　話題提供と話し合い情報

- ６月例会：「イラン情勢を掘り下げる3つの話」　末包通信さん紹介
  - ①生活困窮と国民の団結：アメリカとイスラエルが読み違えたこと
  - ②ペトロダラー体制の弱体化：革命後のイラン体制が目指すもの
  - ③イラン民主化の行方：下からの民主化はなぜ大きくならないのか
- ７月例会：「生涯健康脳について考える３つの話」　末包通信さん紹介
  - ①委縮する脳：個人差に注目
  - ②脳を委縮させる要因：ある程度なら大丈夫か？
  - ③認知症予防：一つでもいいから少しづつ始めよう
- ８月例会：「東京一極集中について考える３つの話　末包通信さん紹介
  - ①地方交付税制度：交付金がいらない都道府県は東京都だけ
  - ②東京一極集中解消のために：方策はある、しかし・・・
  - ③東京都の言い分：国の在り方を問う

ＯＢ会コラム②

OB会コラム②は常連の別所さんです。今回は大阪万博で開催された研究発表会の記事で、青森の農業高校の生徒が発表した除草剤散布の改善が最優秀となった話です。リンゴ園の消毒は作業者の体に大きな負担がかかるということで問題となっていますが、このような改善を高校生が行ったことの意義は大きいと思います。以下紹介します。

「知の甲子園」青森県立名久井農業高校優勝

OB会　　別所　敬子

青森県立名久井農業高校環境システム科栽培環境班は7月22日、大阪・関西万博で開かれた「Q-1 U-18が未来を変える研究発表ＳＨＯＷ」の決勝で除草剤を泡で散布する研究を発表し、最優秀に選ばれた。大会は１８歳以下の若者が社会課題の解決に向けた研究を９分間で発表する「知の甲子園」と呼ばれ、４回目の今年は２９３チームがエントリーした。

Ｎ（女性）さん、Sさん、Hさん、Dさんのチームは、除草剤を天然の展着剤であるサポニンで泡状にする研究を発表。これを多く含むムクロジやサイカチ、セイタカアワダチソウといった草木を煮出した汁と水を混ぜた原液を噴霧器で散布。雑草のセイタカアワダチソウを乾燥粉末にすれば、低コストが実現できると訴えた。泡散布がミスト噴霧に比べてドリフトは７割減、作業時間は半減、薬剤使用量も55%減ったと報告。散布後の土壌細菌数も泡散布が多く残り、有用な菌も生かすことを確かめた。「農薬が体にかかる…」アルバイト先の農家の悩みをきっかけに。チームを率いるNさんは週末、南部町の農園でアルバイトし、リンゴの摘果などに当たる。葉面散布時には風で農薬が体にかかるという悩みを知った。泡散布のきっかけは高校１年生だったNさんがしゃぼん玉で遊んでいた時に一つのしゃぼん玉は風に吹かれて飛ぶが、複数のしゃぼんが泡状になるとストローの先から落ちることに気付き、着目した。アルバイト先で泡散布の効果を実証。園主も「除草剤以外にも展開する可能性がある」と期待する。

質疑では、審査員５人と専門家からの質問に４人が連携して回答。他のコンテストで受けた質問から対策を練り、今大会に的を絞り３カ月特訓。専門家から泡の欠点を聞かれたNさんは「農薬登録に時間がかかること」と答えた。Sさんが「農業系の大学に進学し実験で正確なデータを出し、卒業後に農薬会社に就職し自分の手で登録したい」と。Hさんは「将来、独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）に勤め、安価で環境保全につながる泡散布を世界で広めたい」との展望を重ねると、会場が拍手に包まれた。（日本農業新聞2025年7月24日記事引用） 最初のプレゼンテーション審査では2位であったが、専門家からの質問、回答後の審査によって逆転首位を獲得した。後者で満点を付けた審査員の宇宙飛行士・野口聡一さんは「研究が未来を変えてくれるかもしれない希望を感じた」と手放しで評価した。

テレビ映像（テレ朝）で見た応援団席からのインタビューに答える祖父母や両親の姿から考え合わせると、代々家業を大切にしている地域で育った若者の発想ではなかろうかと考え、高校と県のホームページをみた。人口減少都道府県順位2位の青森県では人口減少や人口構造の変化を踏まえた持続可能な地域づくりを進めるため「あおもり創生総合戦略」（2024年3月）が設定された。

- 政策分野1：所得向上と経済成長につながる魅力ある多様なしごとづくり
- 政策分野3：持続可能な地域づくりという3つの政策分野を設定し取り組みを進めている。

高校のホームページから読み取った教育方針もこの戦略に沿ったものと私は理解した。
日本のカロリーベース食料自給率は1965年73%だったが、低下傾向が続き、2000年代に入ってからは概ね横ばいで推移し、2024年38%である（農林水産省　日本の食料自給率　より）。

4名の高校生には 食料自給率向上を目指して 日本農業の旗頭としての活躍を期待したい。



司会の林修氏から最優秀賞の
盾を受け取る４名の高校生

日本農業新聞
2025年7月24日
掲載写真借用

発行人：市民環境大学OB会　田中良一　　編集担当：OB会　尾添俊二